

知的障害児に対する「自立活動の個別の指導計画」

ー 本人参画型の作成と活用 ー

特別支援教育分野 (19220916) 志 鎌 知 弘

本研究は、知的障害のある生徒に対して、「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」を作成し、その満足度を検証することを目的としている。1年次は、生徒本人が自立活動の指導に取り組む意義と自己の理解をし、自立活動の目標や学習内容を考える内容で授業実践を行った。その授業の満足度を測定し考察した結果、生徒本人が自分自身について考え、将来への思いや願いに沿った目標が設定でき、生徒本人の高い満足度が示唆された。

[キーワード] 自立活動、個別の指導計画、本人参画、知的障害

1 問題

『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編(幼稚園・小学部・中学部)』(2018)では、「障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し自立を図るために必要な知識、技能及び習慣を養うこと」と、小学部・中学部の教育目標において、自立活動に関する目標を掲げている。その上で、自立活動の目標として、個々の児童又は生徒の自立を目指すことや、心身の調和的発達の基盤を培うことを挙げている。

自立活動は、特別支援学校の教育課程において特別に設けられた指導領域であり、授業時間を特設して行う自立活動の時間はもとより、学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとしている。

「障害のある児童生徒の教育においては、「教育課程上重要な位置を占めている」や「自立活動の指導の重要性に鑑み」と、その重要性が明示されている。また、知的障害児に関して、自立活動の指導を効果的に行うことの必要性を挙げている。

さらに、自立活動の指導に当たっては、個別の指導計画を作成することが明示され、作成が義務付けられている。実態把握、指導目標や具体的な指導内容の設定の手続きの中に、「指導すべき課題を明確にすること」、「指導すべき課題相互の関連を検討する」こととなった(北川・安藤, 2019)。

一方で、埼玉県立総合教育センターの調査(2013)では、「個別の指導計画の作成が適切にされていない」、「何を指導してよいかわからない」等といった自立活動の指導上の課題があげられている。こ

うしたことについて、八幡(2013)は、特別支援学校の自立活動の個別の指導計画について、活用面で課題を指摘している。

『特別支援学校学習指導要領解説自立活動編』(2018)では、「個々の児童生徒本人に可能な手段でコミュニケーションを図り、本人の思いや願い、将来に向けた希望等に耳を傾けながら、長期的な視点に立って指導に当たることにより、児童生徒が、自己を的確に捉え、自己の成長に気付くことにもつながると考えられる。」と本人の思いや願いを取り入れることの重要性を示している。

菊池(2013)は、「特別な教育的ニーズを有する児童生徒一人一人のより豊かな自立と社会参加のためには、本人主体の教育の充実を図るとともに、各学校・学部段階を通しての一貫性・系統性のある指導・支援の充実を図る必要がある。」と述べており、さらに、「今後、学校教育のみならず、様々な場面における本人参画を実現すること」と学校現場にとどまらない他分野でも本人参画の必要性について示唆している。また、三浦(2017)は、「本人参加型不登校改善会議」の手法で、不登校・不登校傾向の改善を報告し、本人の参加や自己決定の重要性を示唆している。

自立活動の目標が「障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服する」ことから、自立活動の指導は、学習に取り組む児童生徒本人の自己理解が重要な視点と言える。その際、自立活動の指導計画に児童生徒本人も積極的に参画し、自己を理解しながら自己選択や自己決定をするこ

とで、より意欲を高めて主体的に学習に取り組むことができる考える。

なお、本研究では、本人のより主体的な活動をねらい「参画」という文言を用いているが、学習指導要領等で用いている「参加」という文言と同義である。

2 目的

本研究では、特別支援学校に在籍する知的障害児に作成する、「自立活動の指導の個別の指導計画」について、1年次は、以下の仮説に基づいて作成し、その実践を検証する。

仮説:「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」を作成し、学習者本人が自己理解をしながら学習に取り組むことで、生徒の学習に対する満足度が高まるのではないか。」

その上で指導目標や指導内容の在り方について考察し、2年次以降、効果的な活用を検証したい。

3 方法

(1)「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」の作成の手法

①「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」

自立活動の個別の指導計画を作成する際に、児童生徒本人が参画し、自己を理解しながら本人の思いや願い、考え等を取り入れて作成する指導計画のこと。本人が、自立活動の指導を学ぶ意味を知り、その上で自立活動の内容として挙げられている6区分で自分自身を捉え、目標や学習内容を考える。それらを実際の自立活動の個別の指導計画を作成する際に取り入れる。

②手続き

「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」の作成は、計3回の研究授業において、以下のような手続きで行った。

1 教時目：自立活動の指導の意図理解、自立活動の内容の6区分から自己理解

2 教時目：自己理解の整理、卒業までの目標及び学習内容の設定

3 教時目：自立活動の指導目標との比較、学習内容の整理

(2) 対象, 期間

①対象

X 県立 Y 特別支援学校に在籍する高等部 3 年生(以下、対象生徒)を対象とし、自立活動の指導を

行う。対象生徒は、知的障害と肢体不自由がある。音声や文字でのコミュニケーションが可能である。

②期間

20XX 年 10 月～11 月の 3 週間に、1 回あたり 50 分の研究授業を計 3 回実施した。

(3) 分析方法

学習時に使用した学習プリント(筆者作成)の記入内容や授業中の発言(ビデオ記録)、授業後に取った満足度に関するアンケートの結果を整理し、計 3 回実施した研究授業後の事後研究会を基に、「学習に関する満足度」について分析を行った。

(4) 倫理的配慮

対象生徒には口頭による説明を、保護者には担任を通して書面による説明を行い、同意書の提出をもって同意を得た。

4 結果

(1)「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」の作成

①対象生徒の作成した学習プリントの内容

研究授業にて対象生徒が記入した学習プリントは、全て対象生徒が自筆した。(原文のまま掲載)

a) 自分のことについて(自立活動の内容から)

健康の保持：頑張りすぎてつかれがたまりやすい。皮膚科にアトピーの薬をもらいに行っている。

心理的な安定：イライラすることが多い。初めてのことは緊張しやすい。

人間関係の形成：自分のことばかりで相手のことが見れなくなる。ラインをしている。

環境の把握：歩く時、つかれがたまるとバランスをくずしやすい。

身体の動き：手がかたまって思いどおりに動かなくなる。OT(作業療法)に月 2 回通っている。

コミュニケーション：つかれている時やイライラしていると言葉づかいがきつくなる。

b) 目標

イライラした時も深呼吸し、リラックスしたい。

手はつま先を使って、足は一歩ずつしっかり足をつきながら歩きたい。

20XX 年 4 月は、いろいろなことを頑張ってみんなに「すごいな」と言われたい。

c) 学習内容(必要だと考える学習内容)

つま先を使ってやる学習。

あんまり関わりがない人と関わる学習。

d) 学習内容を分類して整理
前時の内容を 5W1H で整理した。

対象生徒が作成した自立活動の個別の指導計画の実際を図 1 に示す。

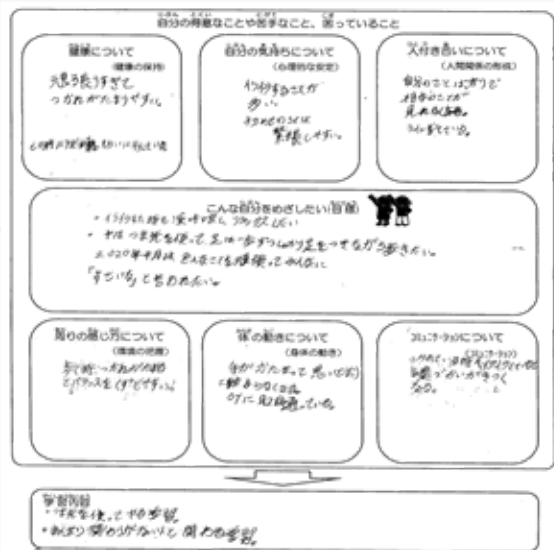


図 1 対象生徒が考えた個別の指導計画の実際

②対象生徒の授業中の発言(ビデオ記録より)

3 教時目に自立活動の指導目標と比較した後、「手や足のことが書かれていた。」と発言した。また、授業の終盤に感想を聞かれた際、「これからの目標を具体的に考えられよかった。これを心にしまって、日々の生活を頑張りたい。」と発表した。

(2)満足度について

満足度に関するアンケート(図 2)は、3 回の研究授業後に、5 項目の質問を、4 段階(0~3 点)にて聞き取り調査を行った。その内容は、問 1. 学習のねらいについて、問 2. 自己理解について、問 3. 将来のことについて、問 4. 個別の指導計画について、問 5. 学習の満足度についてである。その結果を図 3 に示す。



図 2 満足度についてのアンケート

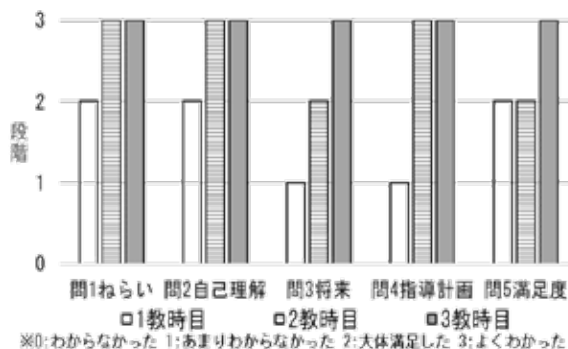


図 3 満足度に関するアンケート結果

また、アンケートの聞き取りでは、「通知表(自立活動の指導計画の目標)と比べたところがよかった。」と答えた。

5 考察

(1)「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」の作成

1 教時目において、自分のことについて記入する場面で対象生徒は、「頑張りすぎて疲れがたまりやすい。」(健康の保持)、「手がかたまって思いどおりに動かなくなる。」(身体の動き)など、自分が課題だと感じていることを捉えて記載した。『特別支援学校学習指導要領解説自立活動編』(2018)の実態把握に関することでは、発達や経験の程度、興味・関心、生活や学習環境なども把握することとしている。これを踏まえて、2 教時目に再整理したことで、対象生徒は、「皮膚科にアトピーの薬をもらいに行っている。」(健康の保持)、「ラインをしている。」(人間関係の形成)など課題面だけでなく、現在していることについても自分を捉えられるようになったと考える。

このことから、自立活動の内容の 6 区分に当てはめて、自分のことを捉えられるようになるためには、今していることや興味・関心のあることなど、捉えやすいところから取り組むなど工夫する必要があると考える。

目標を設定する活動では、2 教時目の始めに、「イライラした時も深呼吸し、リラックスしたい。」「手はつま先を使って、足は一步ずつしっかり足をつきながら歩きたい。」と、対象生徒が課題だと捉えていることに対する目標を設定していた。菊池(2013)は自立と社会参加のために本人主体の教育の充実を述べている。そこで、社会参加時の目標を想定するようにしたところ、「いろいろなことを頑張ってみんなに『すごいな』と言われたい。」と設定した。これは、高等部 3 年生ということも

あり、卒業時になっていたい自分の姿を想像して、対象生徒の将来への思いや願いに沿った目標を設定できたと考える。

学習内容を設定する活動では、2 教時目では、「つま先を使ってやる学習。」「あんまり関わらない人と関わる学習。」と設定した。3 教時目で、この内容を 5W1H で整理する活動を行った結果、何を(What)と、どのように(How)学習するかという項目は空欄になった。このことから、対象生徒は、目標を達成するための具体的な学習内容についてイメージしにくかったと考える。埼玉県立総合教育センター(2013)は自立活動の指導上の課題を挙げており、本研究でも生徒自身が具体的な学習内容を設定するのは、教育課程や教育資源、専門的な内容も含まれるため、難しい面もあると考える。そこで、生徒の捉えた自分や目標を受けて、教師が学習計画や内容を具体的に設定・提案することで、生徒は納得して意欲的に取り組み、その結果満足度がより高まるのではないかと考える。

(2) 満足度

満足度に関するアンケートでは、「この学習の満足度はどれくらいですか。」という問いに対し、1 教時と 2 教時の後は「大体わかった」、3 教時後は「よくわかった」と答えており、対象生徒の満足度の高さが示唆された。これは、3 教時中の授業の感想にて「これからの目標を具体的に考えられよかった。これを心にしまっ、日々の生活を頑張りたい。」と発言したことからもうなずける。

三浦(2017)は、本人の参加や自己決定の重要性を示唆している。本研究では、対象生徒が「通知表と比べたところがよかった。」と答えており、自立活動の指導目標と自分が考えた目標とを比較するという本人が参画したというイメージがもてたことで、高い満足度につながったと考える。さらに、3 教時後の翌日の自立活動の指導の時間にて、対象生徒が前屈をしていることに対して、筆者がその理由を尋ねると、「体を柔らかくするため。」「歩きやすくなる。」と答え、その活動をする意義を意識できているとが考えられた。

6 今後の課題

本研究は、設定した仮説に対し、「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」を作成するための、本人が考える指導計画作成までの実践を検証した。その後の、自立活動の指導計画作成や指導実践を

通しての満足度に関する分析や検証は、中長期での検証が必要だと考え、2 年次に実践したい。

本研究は、1 事例の実践によるものであった。今後は、複数事例での実践を行い、仮説をより裏付けるものとして、個に応じた方法やアンケート以外でも満足度を測定する方法等を工夫していく必要があると考える。また、満足度にとどまらず、児童生徒が、「どのようなことを学んだか」や「どのようなことが身に付いたか」についても意識できるようにしていくことも必要であると考えられる。

7 謝辞

本研究を試みるにあたり、多くのご協力をいただいた対象生徒とご家族、Y 特別支援学校の先生方に感謝を申し上げます。

引用文献

- 菊池一文(2013)「特別支援教育における ICF の活用によるキャリア発達支援の可能性」、『国立特別支援教育総合研究所研究紀要』, 第 40 巻, 23-30.
- 北川貴章・安藤隆男(2019)『「自立活動の指導」のデザインと展開-悩みを成長につなげる実践 32-』, 第 1 章, pp. 14-37.
- 三浦光哉(2017)『「本人参加型不登校改善会議」の手法による不登校・不登校傾向の改善』、『山形大学大学院教育実践研究科年報』, 8, 36-44.
- 文部科学省(2018)『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編(幼稚部・小学部・中学部)』, 開隆堂.
- 埼玉県立総合教育センター(2013)「知的障害特別支援学校及び特別支援学級における知的障害のある児童生徒の自立活動に関する調査研究 II」、『埼玉県立総合教育センター研究報告書』, 第 371 号, 10.
- 八幡ゆかり(2013)「特別支援教育における自立活動の今日的意義-歴史の変遷の分析をとおして-」、『鳴門教育大学研究紀要』, 第 28 巻, 39-48.

“Individual Guidance Plan of Self-Reliance Activities(jiritsu katsudou)” for Children with Intellectual Disabilities : Development and Appliance of a Student Concerned Tomohiro SHIKAMA